



須坂市社会福祉協議会会長賞 支えられて30年

小林 たつ江 中野市松川

私は今83歳、入院中です。病気と付き合うようになったのは50代のころからです。

次女の結婚が決まり持たせてやる布団づくりをしていたときに、手の指先の動きが思うようにならなかったのが始まりでした。布団を何とか仕上げた後、何箇所もの病院や整骨院、整体を受診しましたが原因はわからず、信大付属病院でやっと首の骨の間に腫瘍ができていることがわかり入院し手術をしました。手術は成功したそうですが、手術後の3日目から胸から下の感覚がなくなり動くことができなくなってしまいました。それでもリハビリを受け3年後には松葉杖で自宅に帰ることができました。補装具をつけた足には常に正座から立ち上がったときのような痺れが残っていて気を抜くとストーンと転んでしまう状態でした。それでも動きの悪かった手は動かすことができるようになっていましたので、好きだった編み物をしようとセーターや帽子など編み始めました。

夫や子供、孫や姉妹、友達へと編んでいると、教えてほしいと近所の人たちが集まって来るようになりました。中には煮物などを持参し、お昼を一緒に食べて行く人もいました。どんな毛糸が良いかなと手芸屋さんに電話で相談すると、見本を持って来てくれ、簡単な編み方やコツなども教えてくれました。一度編んだセーターを編みなおしできるように解いてくれる人や、使わないからと自宅にあった毛糸を持って来てくれる人もいました。みんなでわいわいと話しながらずいぶんたくさん編んだ

ように思います。

70歳を過ぎた頃からはベッドで過ごすことが多くなってしまいましたが、編み物仲間は相変わらず顔を出してくれます。入院している今はアクリルたわしを編むことがやっとですが、出来上がったたわしをみんなに貰ってもらうことがうれしく、何よりひ孫が喜んで何個もほしがるので張り合いに編んでいます。

今まで30年近く夫がずっと看病してくれていますが、夫は畑仕事が看病の息抜きのように、毎日畑に出かけています。収穫した野菜は食べきれず、ご近所や知り合いにおすそ分けしていますが、その野菜を煮物や漬物にして届けてもらうことがあります。食事の用意も夫がしていますので、とてもありがたく、おいしくいただいています。

夫や子供、小学校からの同級生、そして病気になってから知り合った編み物仲間やご近所の方々に支えられ、好きな編み物をしながらこうしていただけることは幸せなことなのかな？そう思い今日もひ孫の顔を思い浮かべながらアクリルたわしを編み始めています。

